

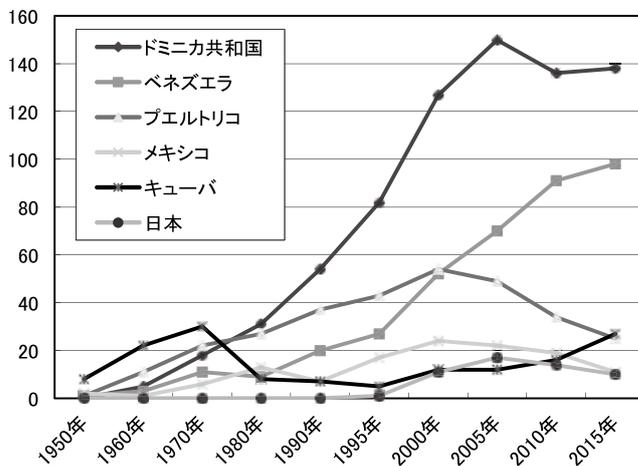
「野球移民」から浮かびあがる ドミニカ共和国の社会と文化

窪田 暁

ドミニカ共和国（以下、ドミニカ、図1）は、米国のメジャーリーグ・ベースボール（以下、MLB）に多くのプロ野球選手を送り出す国として知られている。現在、MLBに所属する大リーガーのうち外国出身選手の割合は30%を超えているが、とくにカリブ海地域を中心としたラテンアメリカ出身選手の割合は大リーガー全体の26%にもものぼっている。そのラテンアメリカ出身選手のなかでもとりわけ存在感を示しているのが、ドミニカ出身の選手たちである。2015年のシーズン終了時点では、138人と大リーガー全体の11%を占め、外国出身選手のなかでは第1位の数字である。ちなみに、2番目に多いのがベネズエラの98人、3番目がキューバの27人となっている（図2）。

一方、国内のプロ野球界でもカリブ海地域出身の選手が増加しており、外国人選手＝米国出身という図式は過去のものとなりつつある。また、13年に開催された第3回WBC（ワールドベースボール・クラシック）でドミニカが優勝したことで、野球強豪国として一般にも知られるようになった。しかしながら、なぜドミニカからこれだけ優秀な選手が誕生するのかという点については、貧困から抜け出す手段であるという表面的な理解にとどまっているのが現状である。そこで、本稿では野球がドミニカの社会や文化といかに密接に関わり発展してきたのかを現地での調査結果をもとに明らかにしておきたい。

図2 MLBにおける外国出身選手数の推移



(Baseball Reference.com をもとに筆者作成)

米国との関係

19世紀後半に伝播した野球が最初に浸透したのが、ドミニカ南東部のサンペドロ・デ・マコリスである。サトウキビ・プランテーションで働く労働者の娯楽として広まり、米国資本による製糖工場の買収がすすむと競技人口は急速に拡大する。さらに1916～24年の米国による軍事占領時代を契機として、アマチュア野球の発展にあわせて次第に熱を帯び、製糖会社のオーナーは、優れた選手を工場のクラブに引き抜くようになった。サンペドロ・デ・マコリス周辺からは、これまで多数の大リーガーが輩出しているが、それは比較

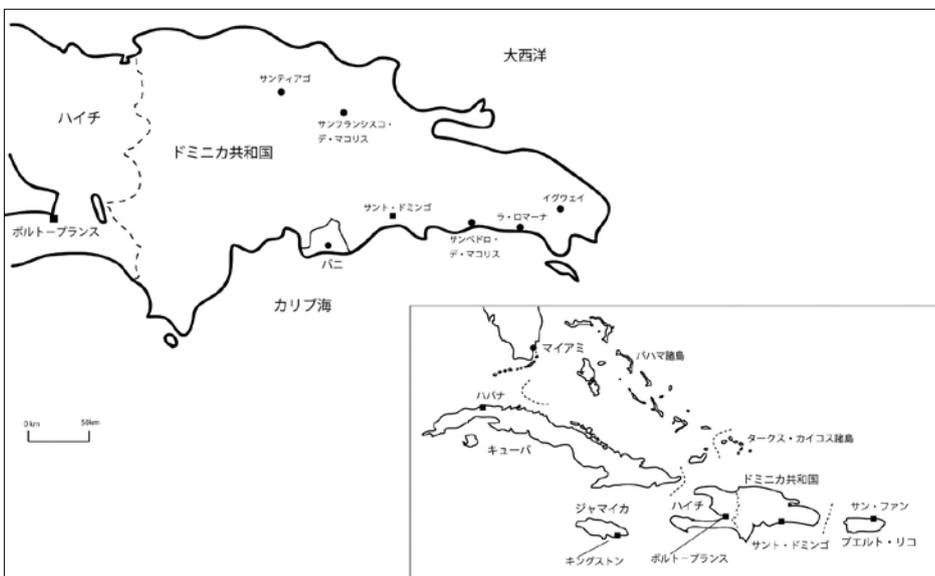


図1 ドミニカ共和国地図
(筆者作成)

的はやい段階から製糖業が栄えたことにより、野球の発展に不可欠な資本提供者（パトロン）が数多く存在していたことが理由としてあげられる。

ドミニカがプロ野球選手の供給地になるきっかけは、59年に起きたキューバ革命である。米国との国交が断絶したことにより、それまでMLBに大リーガーを供給してきたキューバからは、正式なルートによって選手が輩出されることはなくなった。そこで、MLB球団のスカウトはおなじカリブ海地域にあるドミニカに目を向けるようになったのである。キューバ革命の直前にはじめての大リーガーが誕生していたこと、トルヒーゴ暗殺後にアメリカ軍による2度目の軍事介入（65年）を経験したことも追い風となった。

このように、ドミニカで野球が浸透していく過程には、そのときどきの国際情勢、とりわけ米国とドミニカのあいだでの政治、経済、文化の領域における力関係が密接にかかわっていることがわかる。

選手発掘・養成施設

現在、ドミニカにはMLB全球団と日本の広島東洋カープがベースボール・アカデミー（以下、アカデミー）を所有している。MLB球団が、アカデミーを設立した背景には、球団数の拡張にともなう選手数の絶対的不足とFA制度の導入による選手年俸の高騰にくわえ、外国出身のマイナーリーガーに対する就労ビザ割りあて数の制限があった。そこで各球団はビザの必要のないドミニカ国内にマイナー・リーグ組織としてのアカデミーを置き、能力のある選手だけをアメリカに連れてくるという方法をとるようになったのである。アカデミー設立を機にドミニカ出身の大リーガーの数は、一気に増大していることがわかる（図2）。

アカデミーと契約できるのは、17～21歳までの少年である。契約金は、日本円にして20万～1億円にまでのぼり、少年の家族や出身地域の社会に大きな影響をおよぼしている。契約後、選手たちは、アカデミーでの合宿生活を送ることになる。そこでは食事やトレーニングだけではなく、英語の授業までがおこなわれており、ドミニカ国内に米国的な選手発掘・養成施設システムが移植されたとみる事が可能である。これは世界の中核地域から周辺地域に製造拠点を移してきた世界経済の構造と見事に一致する形態で、ドミニカ政府が誘致したフリー・ゾーンの野球版ともいえる。つまり、現地で安価な原材料（少年）を調達し、工場（アカデミー）で会社（球団）が選別し、加工を施し（コ



パリオの路上で野球に興じる少年たち、ドミニカ共和国パニにて（筆者撮影）

ーチング）、米国の基準にあった製品（選手）だけを送り出すという形態が、現在のトランスナショナルな経済活動の究極の姿をあらわしているからである。

移住の文化

1960年代なかばにはじまった米国への移住は、現在も増加をつづけている。人口10,528,000人（2015年、世界銀行）のうちアメリカに暮らす移民の数は、1,414,703人であるが（10年、米国国勢調査）、統計にはあられない非正規滞在者の数をふくめると、実数は200万人以上と推定されている。これにくわえ、スペインやベネズエラ、パナマやプエルト・リコなど米国以外の地域に暮らす移民をあわせると、人口のおよそ3分の1にあたる300万人近いドミニカ人が海外で生活していることになる。彼らからの送金額は、日本円にして年間3,000億円にまでのぼり、ドミニカが移民からの送金に依存する社会であるかがわかる（12年、ドミニカ中央銀行）。

ドミニカが移民送り出し社会になる理由として、経済が米国資本に依存することによって国内市場の成長は必然的に妨げられ、貧富の拡大を招いたことや農業政策の失敗が農家の減少と地方の衰退を招いたことがあげられるが、一方で、ドミニカの地域社会におけるカネにまつわる伝統的な規範意識が移民の創出に大きくかかわっている。その規範とは、ドラッグを売ったり、泥棒をして稼いだカネは、「きたないカネ」とされ、陰口や嫉妬の対象となる一方で、まじめに働いて稼いだカネは「きれいなカネ」とされるというものである。貧困層の人びとにとって、こうした規範に背かずカネを稼ぐ方法は、米国へ移住し、ドルを故郷に送金する以外にないのである。つまり、伝統的な規範の存在が、移住の文化を形成することになったのである。さらにいえば、

この移住の文化を内在化して育ったプロ野球選手にも移民としての意識が埋め込まれているのである。

「野球移民」による送金

大リーガーの年俵は膨大な金額にのぼるが、そのうちの少なくない額が彼らの出身地のバリオ（共同体としての村）に分配されている。筆者の調査地出身のA選手の場合、毎年、1億円近い金額をバリオの人びとに分配している。年俵10億円以上を稼ぐAは、父親と11人の兄弟姉妹にはじまり、親類やバリオの住民にまで分配している。

興味深いのは、バリオの住民への分配方法である。直接、現金を手渡すのではなく、カトリックの行事にあわせる形をとる。クリスマスには、バリオの住民に食糧の詰まった袋を配り、守護聖人の祭りの開催資金を提供するといった方法である。自分が大リーガーになれたのは、神の思し召しであると認識しているため、その見返りとして、「神の子」であるバリオの住民を神に代わって扶養する義務があると考えている。その前提として、バリオの住民全体に野球で稼いだカネは、「きれいなカネ」だという規範意識が共有されていることは言うまでもない。ここからは、大リーガーの分配行動を、一般の移民が故郷の子どもの養育費のために送金していることのアナロジーとして捉えることが可能であり、大リーガーによる分配は、送金として位置づけることができる。

このように「野球移民」とバリオの人びとの関係は、伝統的な地域社会の論理によって規定されており、それが送金という具体的なかたちとなって顕在化したものなのである。いいかえるならば、二国間をまたぐこうしたトランスナショナルな関係性は、明日の生活さえままならない予測不可能で不安定な現代世界を生きぬくために、バリオの人びとが伝統的な規範意識や価値観を武器に生みだした生活戦略のひとつといえるのである。

越境するスポーツ文化

ここまでドミニカにおいて「野球移民」が誕生する背景を米国や出身社会の文化との関係から考察をおこなってきたが、ブラジルにも「野球移民」と呼ぶべき人びとがいることを指摘しておきたい。かつて日本からラテンアメリカへと移住した日本人が移住先で野球を普及させた結果、サッカーが「国技」とされるブラジルから、日系ブラジル人のプロ野球選手が誕生する

までになった。還流した「野球移民」の例として特筆される。

筆者がアメリカのドミニカ移民コミュニティにおいて実施した調査からも、ドミニカ移民が野球を故郷に重ねあわせている実態が観察された。故郷と異なる日常生活でのストレスを発散するためには、故郷の文化とまでなった野球が必要だったのである。このように、世界各地に伝播したスポーツが、受容された地域の文化に取り込まれる過程で独自の意味づけをもつようになってきていることは極めて興味深い現象である。

本稿でとりあげた「野球移民」は、ドミニカやカリブ海地域に特有の現象である。しかしながら、野球をサッカーなどの別のスポーツに、カリブ海地域を西アフリカや南米などの別の地域に置き換えてみれば、「スポーツ移民」が世界各地で同時代的に生じている現象であることがわかる。また、この現象が一般の労働移民とよばれる人びとの増加と歩調をあわせるようにして顕在化してきたことからわかるように、世界的な移民現象のなかのひとつの形態として説明されるべきであろう。つまり、わたしたちが日頃から慣れ親しんでいるプロ・スポーツの世界は、まさに現代世界の縮図ともいえるのである。

（くばた さとる 奈良県立大学地域創造学部専任講師）

【参考文献】

- Hernandez, Ramona and Francisco, Rivera-Batiz 2004
Dominicans in the United States: A Socioeconomic Profile of the Labor Force. In *Building Strategic Partnerships for Development: Dominican Republic-New York State*. Rodriguez M.E. and Hernandez R. (eds.), pp.26-75. Santo Domingo: Fundacion Global Democracia y Desarrollo.
- Klein, Alan M. 1991
Sugar ball: The American Game, the Dominican Dream. New Haven: Yale University Press.

【統計資料】

- Banco Central de la República Dominicana
<http://www.bancentral.gov.do:8080/english/index-e.asp>
- Baseball Reference.com
<http://www.baseball-reference.com/>
- The World Bank
<http://databank.worldbank.org/data/reports.aspx?source=2&country=DOM&series=&period=>
- U.S. Census Bureau 2010 *The Hispanic Population: 2010*
<http://www.census.gov/prod/cen2010/briefs/c2010br-04.pdf>